

金融システムの経済学

宇沢弘文、花崎正晴編

金融制度を一つの公的な社会資本としてとらえ、その安定には専門家による理性的な管理が不可欠だと主張する。金融の「失敗の歴史」を理論的に検証することで、日本の官僚主義や米国の市場主義の限界を明らかにしている。

自由競争モデルが浸透した今日、当事者の職業倫理などに期待するケインズ流の見解には反発も予想される。ただ、社会運営に人間の理性をどう介在させるかは経済学の永遠のテーマだ。ここ十年劣勢に立たされていた分野から新しい潮流が生まれている。〈東京大学出版会・四、〇〇〇円〉

演じられた「楽園」

A・ウィッカーズ著

「芸術と文化の楽園」として親しまれ、日本からも数多くの観光客が訪れるインドネシアのバリ島。東南アジア史が専門のオーストラリア人の著者は、中

世以降のバリ島の歴史をたどりつつ、その楽園像が醸成されていった過程を丹念にたどった。

著者は「世界中にゆきわたったバリのイメージは、忘却のうえに築かれている」という。欧米諸国の植民地主義やインドネシアの国家戦略における位置づけを分析する一方で、島内の権力抗争をはじめ、島民自身の「バリ島」観の変容にも光をあてて興味深い。バランスのとれた視点で読ませる力作だ。中谷文美訳。（新曜社・三、九〇〇円）

神保町の怪人

紀田 順一郎著

古書の街、東京・神保町を舞台に、古書に詳しい著述家が素人探偵さながらに活躍する「古書ミステリー」の短編集。本集

めの極意を「単なる熱意だけでは到底だめ」で、「殺意」と形容するマニア、他人が欲しがっていると聞くと、自分も欲しくなって、他人の入手を、ずるがしくく阻む歌人……。神保町の歴史や古書取引を背景に語られる登場人物たちの多くは、本を

愛しすぎるあまり、しばしば常軌を逸した行動に出る。古書の世界に興味はあるが、どうも敷居が高そうと思っている初心者には、格好の入門書にもなる。（東京創元社・一、七〇〇円）

ハイナー・ミュラー・

マシーン

谷川 道子著

反体制の姿勢を貫いた劇作家ハイナー・ミュラーは旧東独に生まれ、九五年に亡くなった。著者とのインタビューでミュラーは「演劇は死んでしまった。もつたら未来像が存在しえないから」と語る。ドイツという強迫観念を破壊しようとしたミュラーは、皮肉に満ちたモノログで構成した問題作「ハムレットマシーン」を書いた。

本書はドイツ現代文化と演劇を専門とする著者が、九〇年以降ミュラーの動向を追ったドキュメント。「プレヒトの精神でプレヒトを否認した」と言われるミュラーを通し、行き場を失った現代演劇の状況が見えてくる。（未来社・二、八〇〇円）